

ストア派のゼノンとデカルトにおける同意論の構造

福田喜一郎

はじめに

本研究は、同意論の視点でストア派とデカルトの認識論を比較検討し、人間的認識がもつある普遍的な構造を探求する試みである。

ストア派のゼノンは、人間の心に抱かれる「表象(*phantasia*)」を認識の始まりに設定し、この表象が真なる実在に対応しているか否かで「同意(*synkatathesis*)」の可否を判断した。ディオゲネス・ラエルティオスは、この表象と同意との関係性を扱う理論を「同意についての理論(*ὁ περὶ συνκαταθέσεως λόγος*)」(DL 7.49 = *locus classicus*)とていう言葉で紹介して後世に伝えている。

本研究で新たに扱う同意論は、右記のパンタシアーとシユンカタテシスに加えて、これら両者に伴いいうる「確信(*thoria*)」

の三者を構成要素とする人間的認識の営為を論じる理論として提示されている。言い換えれば、表象と同意と確信を構成要素とする認識論である。この三者は哲学史において、その概念内容に変更が加えられ、さらに異なった言葉で表現されているがゆえに、同意論という共通のテーマが存在してきたことが見えなくなっている。

同意論の本格的な意義は、知性が担う知識に対して、さらにこれをいかに受け入れるのかという重要な心の営みがあり、その活動空間への注目にある。ストア派が自覚的に開発したこの心の自由な空間は、同時に懐疑主義者たちに攻撃の余地を与えた。本論で言及するピュロンの懐疑主義は、まさに右記のシユンカタテシスに対する懐疑として登場し、表象ではなく同意の方を徹底的に拒否する態度をとった。

これに対して、デカルトは『方法序説』で詳細に報告してい

るように、知識への懐疑から出発している。本論で示されるように、その際は彼は同時に、知識（デカルトの言葉では「観念」）への同意という知的空間の存在を示している。このゆえに、懐疑の対象は異なるが、彼こそは古代の同意論の継承者である。ただし私は、デカルトがこの着想を直接ストア派から得たと主張するのではなく、サンクロニックにストア派の認識論とデカルトの認識論に共通する構造があると言いたいのであり、本稿はその可能性の試みである。¹⁾

一 ストア派の認識論

古代ギリシアの哲学の最良の案内人と称されてきたキケロは、ゼノンによって開始されたストア派の認識論を後世に紹介するとき、そこにある新しいものが存在していると見抜き、次のように書いている。

「ゼノンは」哲学の第三部門に関してじつに多くの変更を加えた。そもそも感覚について、新しい説を立てたのだ。感覚は複合体であり、一方では外からもたらされた一種の刺激からなる。これをゼノンはパンタシアー「表象」と呼んだが、われわれは表象 (*visum*) と呼んでいいだろう。「そして、これを定訳としよう。いまからの話の中では頻繁に使わなければならないからね。それはともかく、この表象感覚にいわば受け取られたものに精神の同意 (*assensio*) を結び合わせ、こちらのほうはわれわれの内においてわれ

われの意志にかかっている (*voluntarius*) としたのだ。」

(Cicero, *Academia*, 1.40)

「*visum* (現れ、表象)」というラテン語訳は、ギリシア語が本来もっている意味を正當に継承している。英語では *appearance* となるであろう。representation と訳される場合もある。しかしパンタシアーの第一次的な意味は、「魂の」統轄的部分に印された印影」(*SP. 270*) である。私たちはたとえ白い物体を見たならば、その白さが魂に刻印されて「この物体は白い」という表象を得る。

このように魂への印影もしくは刻印と理解されたとき、Long & Sedley の英訳 *impression* がその意を正確に伝える言葉となる。もともとストア派は純粹に非物体的な魂ではなく、「氣息」が感覚器官と魂を結びつけていると考えているように、物体的な説明方式を好んでいる。したがって、*impression* がもつ *press* という物体的な連想をさせる言葉は、その意をくんでいる。これに対して邦訳はパンタシアーという語のもともとの意味を継承している。

シュンカタテシスは *assensio* と訳され、後に述べるデカルトもこの言葉を用いている。英訳の *assent* もこのラテン語訳の踏襲である。ただしこの語は、この訳語だけが継承されているわけではなく、さまざまに語られて今日まで至っている。たとえば、シュンカタテシスは英語を用いるストア派や古代の懐疑主義の研究者においても、*assent* ではなく *belief* として言い

換えられているほどである。

キケロの右記の説明において、シュンカタテシスが意志的な働きとして紹介されている点にも注目したい。ストア派では、認識論における意志の働きという議論は見られない。しかしすでにキケロにおいて、認識能力における意志の働きが意識され始めたと言いうことができよう。これはデカルトの意志の働きを考える上で示唆的である。

表象の始まりは感覚的なものであるが、単なるセンス・データを意味しているのではない。人間の言語活動を非常に意識していたストア派は、すでに表象において「レクトン (λεκτόν = 語られる内容)」が伴っていたのであり、それは分節化され理性的な対象として語られている。言い換えれば、命題化されている。たとえば「ソクラテス」の感覚像は「ソクラテスは市場で議論している」というようなレクトンとして理解されている。彼らは命題を「それ自身で完結して(完全な文となつて)いるレクトン」(DL 743)と呼んでいた。さらに推論や行為も人間の魂に対する現れとして、シュンカタテシスの対象となつていった。

ではいかなる場合に同意が可能であろうか。正しい表象の把握は次のように説明されている。「現実存在しているものから生じ、しかも現実存在しているものに即しながら、(われわれの心に)押印され、刻印され、捺印されているものごととであつて、現実存在していないものから生ずるような表

象は、これには該当しないのである」(DL 750)。こゝでは、表象と表象を引き起こす原因が区別され、後者の実在が認められるとき、正しい表象となるのである。魂への正しい刻印が真なる表象であり、ストア派はこれを「把握的表象 (καταληπτικῆ φαντασία)」と名付けた。

この「把握」についてロングは重要な指摘をしている。正しい表象を引き起こす原因は、必ずしも実在する対象ではなく、「そのとおりである (is the case)」ものをも意味している、と解釈している⁽²⁾。実際に彼がそこで指摘しているギリシア語の動詞 *ύπόκειναι* (DL 754) は the fact is that... という意味で用いられる語である (Liddell and Scott's, *Greek-English Lexicon*)。ストア派は物質的実在を思想の基本に置きながらも、非物質的な事実を表象の原因として認めている。

このような把握的表象に対してなされる魂の営みが同意である。キケロはこの同意を、表象に対して「信頼性 (fides)」(Cicero, *Academica* 141-2) を与える行為としても理解している。Fides はピステイスのラテン語訳である。セクストスも表象を論じるときに、議論の拮抗を目指す懐疑主義者はもろもろの表象が「信憑性 (fictus)」と「非信憑 (amortus)」という点で等しいと主張していた (SE 1.227)。ピステイスの存在は、同意が単に表象に対する論理的な同意を意味するだけでなく、魂の積極的な関与が伴われていることを意味している。

豊かな内包をもつピステイス概念は、シュンカタテシス概念

と共に、近代の西洋語において複雑な変容を受けることになる。ピステイスは英語で *trust, faith, belief* などと訳される一方で、その訳語の一つ *belief* はシユンカタテシスを意味する場合がある。もちろんそれぞれ異なった意味で用いられているが、その重奏性は言語の多様性だけでなく、ことがら自体のあり方に要因がある。たとえばゼドラーは、パンタシターに対する同意を *belief* と言い換えて、この *belief* には *opinion (δόξα), cognition (κατάγνωσις), understanding (ἐπινοή)* の三つのヴァリエーションがあると述べているほどである。³⁾

二 デカルトの同意論

デカルトの同意論は、理性をよく導くために彼自身が設定した「規則」の一つと、哲学の第一原理の発見においてはっきりと見てとることができる。

私が明証的に真であると認めたくえでなくてはいかなるものをも真として受け入れないこと。言いかえれば、注意深く速断と偏見とを避けること。そして、私がそれを疑ういかなる理由ももたないほど、明晰にかつ判明に、私の精神に現れるもの以外の何ものも、私の判断のうちにとり入れなごんご。 (*Dis. VI 18*)

こついで「明証的に真である」と認める能力は「知性 (*intellectus*)」[「悟性」とも訳されうる]であり、「真として受け入れ (*recevoir pour vrai*)」[私の判断のうちにとり入れる (*comprendre en mes*

jugemens)] 能力は「意志 (*voluntas*)」である。ストア派の認識論との対応関係において表すならば、前者が把握的表象、後者は同意ということになる。そして「疑う理由もない」は確信に対応する。次の引用は、思惟する自我の発見を述べた有名な箇所である。

「私は考える、ゆえに私はある」 *Je pense, donc je suis.* というこの真理は、懷疑論者などのような法外な想定によつても揺り動かさえぬほど、堅固な確実なものであることを、私は認めたから、私はこの真理を、私の求めていた哲学の第一原理として、もはや安心して受け入れることができる、と判断した。 (*Dis. VI 32*)

ここでデカルトは同意を慎重に語っている。それは「安心して受け入れる (*recevoir sans scrupule*)」⁴⁾、⁵⁾「判断した (*jugé*)」と表現されている。両者ともに同意の表現である。哲学の第一原理の発見においてこそ、同意か否かが問われている。デカルト哲学の核的部分において、同意という意志の営為が全面に現れているのだ。デカルトはこの同じ哲学原理の発見を『省察』でも繰り返している。彼はその発見へのプロセスにおいて懷疑を遂行する際に、「これからは同意 (*assensio*) を控えるべきである」 (*Med. VII 22*)⁶⁾ 「同意を差し控える (*me assensio*)」 (*Med. VII 23*) とどうように、同意論の基本用語を用いつつる。

これらの用語に関しては、リコ・ヴェイツがデカルトの「信

念の主意主義 (doxastic voluntarism) について論じている際に、*to believe* と同じ意味を表す言葉として *affirmo, assentio, confido, credo, judico, croire, recevoir* を挙げている。⁽⁴⁾ 私は *admitto* (*Med.* VII 27) を加えて、これらをデカルトにおける同意論の基本タームとしたい。そしてこの一連の「同意」語がさらに意味をもつのは、デカルトの誤謬論においてであった。

デカルトが同意を寄せるのは、精神に現れている明晰判明な観念である。彼の観念の本性は、外界の実在とは切り離して精神に現前する意識内容(意識の様態)の「表現的実在性 (*realitas objectiva*)」であり、認識主体がそこに積極的に関わって初めて理解されうる概念なのである。したがってそれは、ストア派が考えていたような、事実あるものに刻印された表象(概念を含む)ではなく、精神の眼によって能動的に捉える観念ということになる。

パンタシアーにおいては実在するものからの直接的刻印が表象として理解されているが、デカルトにおいては身体的特徴をいっさい含まない思惟する自我が抱く概念が観念である。とは言えデカルトにおける観念は、認識における同意の構造を考へるならば、ストア派のパンタシアーに対応する位置づけが認められる。デカルトにおいては外界と自我の存在が截然と分離されているだけである。

デカルトが論じている思惟の「様態」は「知性の認知 (*perceptio*)」と「意志の活動」であり、前者が「感覚する」「想

像する」「純粹に理解する」などの営為を意味するが、後者の活動は「欲求する」「忌避する」「肯定する」「否定する」「疑う」などの意欲である (*Pr.* VIII 17)。同意は意志固有の活動として同定されている。しかもデカルトの意志は、知性がもつ観念に対して無制限に同意と拒否のできる自由を有している。意志は「意のままに、同意することも同意しないこともできる」(*Pr.* VIII 19)。デカルトは方法的懐疑において、すべての命題を疑ったのであるから、この同意の拒否は自明のことであった。

この意志の同意が真なる観念の範囲を逸脱するとき誤謬が生じる。意志が知性の範囲を逸脱するということである。この意志に責任が帰せられる誤謬の源泉は、『精神指導の規則』において、「想像」と「感覚」とが知性に作用することにあると主張されていた (*Reg.* X 396)。『省察』においては、明晰判明な認知があっても、「以前にくだした判断の記憶」(*Med.* VII 69) が戻ってきてこれを混乱させてしまい、誤謬が生じると説明されている。これはさらに『哲学の原理』において「幼年時代の先入観」(*Pr.* VIII 35) として、誤謬の主要原因だと主張されている。

デカルトは、明晰判明な観念であっても、意志の同意がそこから逸れてゆく弱さにも言及している。それは「いつも同じ考えにしっかりと心をつなぎとめておくことはできないという弱さ (*infirmitas*)」(*Med.* VII 62)。「精神の眼を釘づけにして、たえず同じことを明晰に認知しているわけにはゆかない、という

本性 (nature)」(Med. VII 69)であった。⁽⁵⁾

知性がいくら明晰判明な観念を提示していても、意志の弱さは先入観に屈してしまうことがしばしばである。だから、デカルトは「入念な省察 (mediatio) をしばしば繰り返すことによって、必要のあるたびにその考えを思い起こすようにし、こうして、もはや誤謬に陥らない習慣を手に入れるようにする」(Med. VII 62) ことを求めている。意志は観念に同意を唱え続けなければならぬ。これは、懐疑主義者が同意の回避に力を注いでいたのとは、まったく方向性の異なる心の営みである。

以上の考察から、デカルトがストア派の同意論の基本的構造を継承した哲学者であったことが理解される。本研究がストア派とデカルト哲学を比較する意義はここにある。ストア派は、把握的表象に対する同意に認識論的意義を見いだし、賢者の揺るぎない精神の意義を強調していた。懐疑主義者は、表象の存在だけを認め、同意も確信も回避した。これに対して、デカルトは観念の担い手である知性の他に、同意能力としての意志に明確な位置づけを与えて、この自由な意志に誤謬の原因があることと共に、真なる観念に対する同意の努力の必要性を主張した。

ただしデカルトは哲学の第一原理を確定した後は、心に生じる確信感情にはあまり言及しなくなった。「方法序説」が方法的懐疑によって懐疑の克服の道程を詳細に論じているのに対して、『省察』や『哲学の原理』においては確信に関わる用語は

激減している。欺かない神の存在と物質的事物の存在が証明され、確実な学の歩みが主張されているからであろう。

明証的な観念にのみ同意し、非明証的な観念をすべて拒否するならば、そこにはもはや蓋然性の余地はなくなる。それだけではなく、知識における誤謬を回避するために、自由な意志は知性に従属し、その結果これを超えた自由な同意という知的空間の余地は否定すべきものになる。

またデカルト哲学においては、確信的感情を意味するピステイス的なものは単に附帯的な地位に甘んじることになる。それはその(方法的)懐疑主義との決別をも意味している。積極的な意義をもつのは、思惟という属性をもつだけのコギトと、明証的な観念である。これは学問的真理を念頭に置いていたデカルト哲学の必然的な帰結であろう。

すでに述べたように、古代の哲学者は認識に対する信頼という心の営みにも注目していた。アリストテレスは同意論者ではないが、知識を論じる際に、それがいかに魂のあり方に関わるかを繰り返して論じていた。彼が知識を、魂が経験的に獲得した能力としての「性向 (προϋπόθεσις)」と見なしたのはこのためである。それは同時にことがらを「信じること (πιστεύω)」であった。⁽⁶⁾

本研究が提唱する同意論は、このような心の働きをも構成要素とする同意を扱うものである。ギリシアの哲学者たちはこの問題に気づいて、自覚的にパンタシアーとシユンカタテシスを区別した。それは結果として、懐疑主義が後者を回避する隙を

与えた。しかしデカルトはこれとは反対に、方法的懐疑から出発して、この同意という普遍的構造を独自に展開したのであった。⁽⁷⁾

※ 本文中の引用箇所を示す数字は、ヘレニズムの哲学に関しては左記の主要文献において示されている原資料の巻・章・節の番号を、デカルトに関してはアダンとタヌリ『デカルト全集』の巻の番号とページ数を示している。引用はすべて左記の邦訳文献によるものである。

主要文献

- A. A. Long & D. N. Sedley, *Hellenistic philosophers*, Volume 1 (translations) + 2 (Greek and Latin texts), Cambridge University Press, 1987.
- Œuvres de Descartes*, publiées par C. Adam & P. Tannery, Paris, Vrin, 1996.
- ＜ヘレニズム哲学とデカルトの邦訳文献引用記号＞
- DL: ディオゲネス・ラエルティウス『ギリシア哲学者列伝(中)』加来彰俊訳、岩波文庫、一九八九年。
- SP: セクストス・エンハイリコス『マクロン主義哲学の概要』金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会、一九九八年。
- SD: セクストス・エンハイリコス『学者たちへの論駁2』金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会、二〇〇六年。
- SF: ゼノン他『初期ストア派断片集1』中川純男訳、京都大学学術出版会、二〇〇〇年。
- Reg.: 『精神指導の規則』野田又夫訳、岩波文庫、一九七四年。
- Dis.: 『方法序説』野田又夫訳、以下三書『野田又夫責任編集『デカルト』世界の名著』22、中央公論社、昭和四二年。
- Med.: 『省察』井上庄七・森啓訳。
- Pri.: 『哲学の原理』井上庄七・水野和久訳。

- (1) 同意論の哲学的な意義は、狭義の知性には還元されない意志的な判断の余地を見定めることにある。これは同時に、人間の心が、確実な知識ではない表象もしくは観念にも同意しているという事実を許容することである。もしこれを認めないならば、アリストテレスが「弁論術」で取り上げている「真理に近いこと (eikos = verisimile)」という概念や、ヴァイトゲンシュタインが「確実性について」で取り上げている「世界像」の命題などが成立する余地はなくなるであろう。さらに重要な問題は、宗教における信仰の余地もなくなることである。信仰は客観的知識になりえない存在者への同意 (belief) だからである。なお、信仰を assent の展開として議論しつつある書として、John Henry Newman (1801-90) の *An Essay in Aid of a Grammar of Assent* (1870) を挙げたい。

- (2) A. A. Long, *Hellenistic Philosophy*, London, Duckworth, 1974, p. 127.

- (3) David Sedley, "The Motivation of Greek Skepticism", *The Skeptical Tradition*, edited by Myles Burnyeat, Berkeley, Los Angeles and London, University of California Press, 1983, p. 11.

- (4) Rico Vitz, "Descartes and the question of direct doxastic voluntarism", *Journal of Philosophical Research*, Vol. 35, 2010, p. 117.

- (5) 次の論文は「明晰判明な認知とこれにまつる意志の同意と探求には時間的ギャップが存在していると指摘しつつ、Celia Wee, "The Fourth Meditation: Descartes and libertarian freedom", *The Cambridge Companion to Descartes, Meditations*, edited by David Cunniff, Cambridge University Press, 2014.
- (6) 「ニコマコス倫理学」神崎繁訳『アリストテレス全集15』岩波書店、二〇一四年、二三四頁。

- (7) 最後に参考までに、同意論を展開している他の哲学者の名前をいくつか挙げておきたい。哲学的蓋然論を主唱した Christian August Crusius (1715-1775) はすでにカントに先立って「真と見なすこと (Vorwahalten)」を「同意を与えること (Beyfall geben)」[信28

んよ (Glauben) と言ふ換へつらん (Mog zur Gewißheit und Zuer-
läßigkeit der menschlichen Erkenntniß, 1747, pp. 750-800)。カント
が「思ふんよ (Meinen)」「信んぬんよ」「知んぬんよ (Wissen)」を
Fürwahrhalten の三つのあり方と見なしてつらんが (KrV, A820/
B848) 'Glauben を Fürwahrhalten と言ふ換へつらん locus classicus
はカント書ではなくクルーシウスの右の書である。またそのタイ-
ルにある「信頼性 (Zuverlässigkeit)」という語は、クルーシウスの
蓋然論において「信頼 (Vertrauen)」と同様に、ことがらに同意す
る心の状態を意味している。なおマンドレ・ラランドは、シユンカ
タチシスのドイツ語訳として Fürwahrhalten を提示してつらん。 Cf.
Vocabulaire technique et critique de la philosophie, par André Lalande,
Paris, Presses Universitaires de France, 1980, p. 83.

(ふくた・きんちろう、西洋近世哲学、鎌倉女子大学教授)